

---

---

# 青藍会MD-PhDコース留学助成について

---

---

## 青藍会によるMD-PhDコース留学助成の取り組み

徳島大学大学院医歯薬学研究部統合生理学分野  
Student Lab運営委員会

勢井宏義 (医学部30期)

近年、医学教育に関して、医学科学生のリサーチマインド（研究心）の弱体が大きな問題となっている。“マインド”を数的に計るのは難しいが、指標となるのは、大学院への進学者数と基礎医学系教員における医学部卒業生（いわゆるMD）の占める割合であり、両者とも、今世紀に入ってから大きく減少の一途をたどっている。解剖学や生理学の教授選考にMDの候補は極めて少ないが、優秀なnon-MD研究者を選ぶことも選択肢である。しかし、法医学や病理学は、その業務内容や資格からもMDであることが必須の条件であり、その不足は危機的状況にまで達している。東京大学などいわゆる旧帝大においても同様の問題が意識されるようになり、東京大学の清水孝雄教授を筆頭に多くの有識者によって問題提起された。そして文部科学省も平成24年度に「基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成」と題したプログラムを立ち上げ、改革に乗り出してきている。徳島大学医学部では、上記プログラムに先んじて、23年度より、概算事業「ライフ・イノベーションを推進できる医療人育成のための新たな基礎医学実習の構築」が文部科学省に認められ、5年間でおよそ1億円のサポートを受け、リサーチマインド育成に向けて努力を続けている。(別名Student Lab: 参照 <http://www.tokushima-u.ac.jp/scme/student/>)

徳島大学医学科には、MD-PhDコースがある。このコースを選択する医学生は、4年次で退学して大学院に進学し、医学博士（PhD）取得後5年次に復帰する。学籍を2重に持てない規則のため、4年次で退学という形を取らざるを得ないが、臨床実習前のフレキシブルで発想豊かな若い時期に研究に没頭できるという、かけがえのない大きな利点がある。徳島大学では、退学という大きなハードルの存在にも関わらず、毎年1～2名の学生がこのコースを選

択している。他の国立大学医学部にも同様のコースが存在するが、この“退学型・純粹”MD-PhDコースを、少人数とはいえ毎年維持できているのは他に類を見ない。大学院教育に関して徳島大学医学部が全国に誇れる数少ない特徴の一つであり、このコース進学者を増やすことも上記概算事業Student Labの目的である。

一方、グローバル化も大学の現代的な課題の一つである。国際間の人的交流の活発化が求められている。そこで、徳島大学医学科は、上記MD-PhDコースへの進学者増とグローバル化とを一体化した策として、学部中の長期留学にMD-PhDコースを利用するというプランを提示することとした。グローバルMD-PhDコースと呼んでいるが、特別なコースを新たに設けたわけではなく、MD-PhDコース期間内の過ごし方に、留学という新たな選択肢を提案したものである。臨床実習前の比較的自由な時期に、1～2年の留学を経験することは、単に語学力だけでなく、国際的な視野や研究力、コミュニケーション力の向上などへも大きく利するであろう。もちろん、MD-PhDコースでの留学には、それなりの準備が必要であり、初年次から研究室で実験トレーニングを積むことや1～4年生での十分な成績も留学許可の重要な判断材料となる。

しかし、最も大きな問題はその留学費用である。博士号取得後の留学では、ポスドクなど、就職の可能性も小さくない。院生という身分しか持たないMD-PhDコース学生の留学費用をどうするか？そこで、同窓会である青藍会へサポートをお願いすることとなった。青藍会では役員会でその条件などが議論され、26年度の総会において承認された。青藍会MD-PhDコース留学助成では、10ヶ月以上の留学を実践するMD-PhDコースの学生に50万円が支給される。第1号として、西晃君がニューヨークへ留

学した際にこの助成を受けた（本誌に報告文が掲載されている）。彼は、優秀な学位論文で医学博士を取得し、現在5年生としてクリクラに励んでいる。将来、大学などにおいて、研究医として活躍することが期待されている。

少子化の大きな渦の中、国立大学はターニングポイントを迎えようとしている。明瞭な役割分担（ランキング）の先に統廃合の可能性も否定できない。地方で規模も比較的小さく周辺人口も小さい徳島大学が今後も発展していくことができるかどうかは、

優秀な人材をどれだけ多く輩出できるかにかかっている。医学科の一教員として、本助成を認めていただいた露口勝会長をはじめ役員の先生がたに敬意を表し、そして、すべての会員の先生がたに厚く感謝を申し上げたい。

MD-PhDコース留学助成は、青藍会諸先輩がたから後輩たちへの強く温かいメッセージである。

“後輩たちよ、徳島大学から世界に羽ばたき、  
国際的に大いに活躍せよ！”

## 青藍会MD-PhDコース海外留学助成募集要項

### 1 趣 旨

グローバル化に伴い、国際的に活躍できる人材の育成が求められている中、在学中に海外留学を経験することは、学生の知見を広め成長を促す上でも極めて重要といえます。

そこで、医学部医学科の同窓会である青藍会は、徳島大学医科学教育部MD-PhDコースの学生を対象に海外留学について、その渡航費及び滞在費の一部を支援します。

### 2 応募資格

以下の条件を満たす者とする。

- ① 徳島大学医科学教育部MD-PhDコースに在学する学生で、人物・学業成績、研究意欲及び語学力に優れ、10ヶ月以上の海外留学を予定していること。
- ② 研究留学について、指導教員の下承が得られていること。

### 3 応募期間・締切

応募は随時受け付けるが、原則として、渡航開始3ヶ月前までとする。

### 4 応募方法

別に定める申請書により、申請するものとする。

提出先：青藍会事務局

### 5 審 査

青藍会役員会に設ける審査委員会が行う。

### 6 助 成 額

1人につき50万円を上限とし、1回限りとする。

### 7 受給者の義務

本助成金を受給した者は、帰国後30日以内に別に指示する留学成果報告書を青藍会事務局に提出するものとし、その報告書は、青藍会会報に掲載するものとする。

また、受給者は、帰国後徳島大学医学部の発展に寄与するものとする。

### 8 研究成果の発表

本助成を受けて留学し、その成果を論文や学会等で発表する場合は、当該論文又は学会要旨等に本助成による支援を受けた旨明記すること。

---

---

# 青藍会MD-PhDコース海外留学報告

---

---

## 10ヶ月間のアメリカ留学を終えて

医学科5年 西 晃

私は平成26年2月から12月までの10ヶ月間、青藍会からご支援をいただき、アメリカのニューヨークにあるAlbert Einstein College of Medicineに留学させていただきましたので、報告をさせていただきますと思います。

私は徳島大学にあるMD-PhDコースを利用して、医学科4年生から大学院に進学し、昨年度までの3年間、精神医学教室にて研究活動に従事しておりました。元々精神科医になりたくて医学部に入学したのですが、3年生の時に実施される研究室配属で精神科での研究に触れ、臨床医として患者さんを診るだけでなく、病気そのものを研究することの大切さに気づかされました。できるだけ早く研究を行う上で必要な手技や知識、思考能力などを身につけたいと思い、このコースに進学しました。

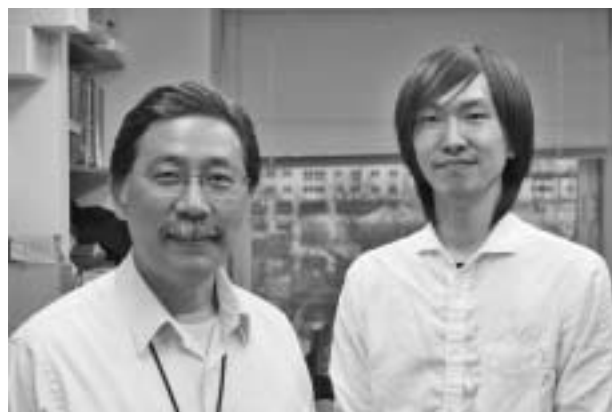
大学院では主に統合失調症の研究を行いました。統合失調症は生涯罹患率1%と、頻度の高い精神疾患ですが、その発症メカニズムなどは未だによくわかっていません。私はOne-carbon metabolismという代謝経路に注目し、血漿ホモシステイン濃度の上昇、ホモシステイン濃度の代謝に関わるメチレンテトラヒドロ葉酸還元酵素の遺伝子多型が、統合失調症の発症リスクを上昇させることを明らかにしました。この研究結果は大森教授の御厚意により、国内学会と国際学会で口頭発表を行う機会をいただき、論文にまとめることができました。

幸いにして最初の2年間で学位取得の目処がつかまりましたので、大学院の最後の一年間、沼田講師にご紹介いただき、Albert Einstein College of Medicineの廣井昇教授の教室に留学させていただきました。廣井先生はアメリカの精神神経分野で最も成功されていらっしゃる先生のお一人で、薬物依存の研究をはじめ、近年は神経発達や自閉症の研究を主に行っていらっしゃいます。徳島大学では患者さんからいただいた末梢白血球を用いて研究を行っていましたが、廣井先生は疾患モデルマウスを用いて研究を行われていました。何をやるにも初めてのことばかりで大変なことも多かったです。それ以上に研究をして

いて楽しい、面白いと思うことが多く、非常に貴重な時間を過ごすことができた実感しております。廣井先生も私をゲストではなく、スタッフとして扱って下さいました。仕事に関しては厳しく、事細かに追求する姿勢を貫き、一方で、わからないことや実験をしていて困ったことについては、建設的で前向きなアドバイスをしていただきました。私の拙い意見にもしっかりと耳を傾けてくださり、研究をする上で、何が良くて何が足りないかを指導していただきました。廣井先生の研究者としての姿勢は私の理想に近いもので、そんな方に出会えたことは本当に幸せだったと思っています。

留学前は廣井先生の下で研究に関することを学べれば十分だと思っていました。しかし、異国で生活をするというのはそれだけで価値のあることなのだと気づきました。普段の生活の中で文化、貧富、地位、肌の色など様々な「違い」を感じることができました。また、アメリカという他国のことを知ったことで日本という国を客観的に見られるようになり、自分の関わっている仕事や生活のことを今までよりも少し大きな視点で見られるようになったと感じています。大学院に進学した頃は全く考えもしていなかった留学でしたが、今は本当に行けて良かったと思っています。

最後になりましたが、研究活動や本留学に関してお世話になりました精神医学分野の大森教授、沼田周助講師、また、新たに奨学金制度を設けて留学をご支援いただきました青藍会の皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げます。



留学先にて  
写真右が筆者、左が廣井教授